

てだこのまちが描く 1人1台端末が生み出す「学び」の未来

～タブレット端末を文房具に、教師を伴走者に～

1 はじめに

(1) 沖縄県浦添市(てだこのまち)について

浦添市は、かつて琉球王国の首都として栄えた歴史ある「古都」です。時の王「英祖王」が太陽の子であったという伝説に由来し、「ていだ(太陽)」と「こ(子)」を合わせた「てだこのまち」として知られています。活気あふれるこのまちは、高い出生率を背景に、次世代を担う子供たちの教育に強い情熱を注いでいます。

(2) タブレット端末と電子黒板へのこだわり

本市は、国が提唱したGIGAスクール構想に先駆け、平成27年度(2015年度)から浦添小、宮城小、港川中へ電子黒板とタブレット端末(iPad)の導入を開始しました。iPadを選択し続けてきた理由は、その直感的な操作性と小学校低学年児童でも持ち運びしやすい携帯性にあります。これらの優位性を活かし、低学年からiPadを「文房具」のように日常使いすることで、思考を整理し、表現し、他者と協働する力を自然に身に付けさせることを目指してきました。

浦添市教育研究所では、毎年市内の全小中学校へ「ICT支援訪問」を行っています。後述する各種研修を含め、充実した活用に向けてのフィードバックを行うことで、授業を教室内だけで完結させずに、広くフィールドへと学びの視野を広げる様子がよく見られるようになりました。

このような学びの形態は、沖縄県が推進する「自立した学習者」の育成、すなわち「目的や状況に応じて自分に合った学び方を工夫できる児童生徒」の育成と深く繋がっています。

2 浦添市 ICT エバンジェリスト

浦添市 ICT エバンジェリスト(以下;エバンジェリスト)は、市内のICT教育を普及・リードすることを目的に平成28年より設置されました。各校長から推薦された意欲ある教諭が任命され、授業での積極的な活用実践や、校内での授業アイデアの提供、他校との情報共有を行う役割を担っています。

(1) 授業実践

本市にiPadが導入された平成27年からエバンジェリスト事業がスタートした平成28年頃には、筆者も教諭として市内小学校に勤務していました。その頃を振り返ってみると、当時はICTを単なる提示用のツールとして使っていたように感じます。その頃から、エバンジェリストは、年間16回以上の公開授業や事例提供を行い、ICTを単なる提示用ツールから、子供の思考を深めるツールへと昇華させてきました(資料1・2)。つまり、

評価軸・項目	代替・増強 (教具・文具の活用)	変容(知的生産と蓄積)	再定義(学習プロセスの転換)
活用レベル	代替・増強の段階	変容の段階	再定義の段階
ICTの役割・特徴	【提示用・効率化の段階】 電子黒板での資料提示、インターネットでの情報収集、ドリル学習。	【思考の可視化の段階】 シンキングツール等を用い、自分の考えを整理・構造化する。	【思考の深化・協働の段階】 共有ノート等で他者の思考と同期し、新たな価値を創造する。
教師の役割(エスコートランナーの視点)	「ティーチャー」 情報を提示し、ICTを使う場面を指示する。	「伴走者への転換」 「それを使ってどう考えよう?」と問い、思考を促す。	「エスコートランナー」 子供が自分に合った学び方(ICT活用)を選択できるよう支援する。
児童生徒の学びの姿	情報を「受け取る」、あるいは従来の作業をデジタルに「置き換える」。	バラバラだった知識や意見がつながり、自分の考えが明確になる。	他者との対話を通じて思考を深め、納得解を導き出す(自立した学習者)。
ICTエバンジェリストによる具体的な実践例	・デジタル教科書の動画でコンパスの使い方を確認する。 ・地図帳やiPadで特産物を調べる。	・クラゲチャートで感想や根拠を広げる。 ・比較・分類機能で図形や食品の性質を整理する。	・心の数直線で葛藤や変化を可視化・共有する。 ・共有ノートで「まちづくり提案書」を協働作成する。

資料1 エバンジェリストによるICT機器を活用した授業の変容

活動開始当初は「操作の習得」が中心でしたが、現在は沖縄県教育庁那覇教育事務所が提唱する「エスコートランナー（伴走者）」としての教師像、すなわち「教え込み」から「学習者に寄り添い、学びを支える」役割へと転換を図っています。



資料2 1人1台端末の活用の様子

令和8年度の設置要項改訂では、従来の授業実践に加え、生成AIの活用や校務DX（職員会議の短縮、業務処理時間の削減）への貢献度も評価対象となり、教師自身の働き方改革と連動した活動へとさらなる変容を目指していきます（資料3）。

浦研通信 生成AI導入の必須条件

あなたの生成AI指数を高めてレッツ！チャレンジ！
今秋の生成AI、授業での活用においてはメリットもデメリットもあります。まずは、教師であるあなたが生成AIについて知っている必要があります。さあ、あなたの生成AI指数を高めて、児童生徒の学びを豊かにしていきましょう！

重要！
小学校児童が授業で生成AIを活用できる条件 2026年1月
①各校のICTエバンジェリストによる先行研究
②ICTエバンジェリストの先行研究をもとにした校内研修の実施（本活用チェックリスト実施を含む）
③原則的に小学校3年生～6年生のみ

<p>【セキュリティ・個人情報編】</p> <ul style="list-style-type: none"> □児童生徒に「自分や他人の個人情報（名前、住所、電話番号）を入力させないルール」を周知した。 □浦添市教育委員会が定めた「利用ガイドライン」の禁止事項を把握している。 □浦添市教育委員会が定めたチェックリストを把握している。 □市教育委員会が定めた保護者同意書をとった。 <p>【情報モラル・著作権編】</p> <ul style="list-style-type: none"> □AI生成したものをそのまま自分の成果物として提出することの危険性を理解できる。 □著作権のある画像や文章をAIに読み込ませる際の注意点を理解している。 <p>【トラブル対応編】</p> <ul style="list-style-type: none"> □児童生徒が不適切な回答（有害なコンテンツ）を生成した際の、「明確に画面を閉じ、報告させる」フローを確立している。 □「AIがこう言っているから正しい」というAI依存（思考停止）が起きないよう、再確認のバリエーションを持っている。 	<p>生成AI指数向上テスト（全10問）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.生成AIが事実と異なることも、もっともらしく回答する現象を何と称しますか？ 2.AIに発達の作文を依頼させる際、名前を入力してはどうでしょうか？ 3.AIで生成した画像をコンピュータに依頼する際、注意すべきことは何ですか？ 4.学校のフィードバックを誤って不適切な回答が出た場合、まず最初にすべき行動は何ですか？ 5.AIへの指示（プロンプト）が曖昧なとき、AIはどう反応することが多いですか？ 6.AIの複数の解き方を教えてくれた際、その内容が正しいか確認する作業を何と称しますか？（ヒント：ブックマーク） 7.AIを使って有名な人の声や話し方を真似させる動画や音声を作成することを何と称しますか？ 8.使用するAIツールの利用規約に定められた年齢制限を把握していますか？ 9.児童が「AIが答えを出してくれたから、もう考えなくていい」と言ったとき、どう対応しますか？ 10.万一、重大な情報漏洩やトラブルが疑われる場合、校内の誰（どの部署）に報告すべきか知っていますか？
---	--

資料3浦添市立教育研究所発行の「浦研通信」

3 市内教職員研修

研究所では、年間を通して市内教職員向けの各種研修及び講座を企画・運営しています。その内容は多岐にわたり、学校や社会のニーズに応じたものとなっており高い評価をいただいています。

(1) 転入教職員対象「ICT活用講座」

他市町村から本市へ赴任した教職員を主な対象として、学年初めに「ICT活用講習会」を開催しています。本市の情報教育の推進方針を理解し、授業支援アプリの基礎的な操作（iPad、学習支援アプリ、学習eポータル等）を習得することで、スムーズに本市の教育活動に適応できるよう支援しています（資料4）。



資料2 1人1台端末の活用の様子

(2) 夏期講座「学習支援アプリの活用」

本市が導入している学習支援アプリの使い方や、授業での活用演習等について、初級編から中級・上級編の段階的な研修を実施しています。研修は、県外から本学習支援アプリを運営する会社から外部講師を招聘し、より分かりやすく、より実践的な内容となるよう工夫しています。参加した教職員からは「生徒の考えを瞬時に見とれる」「以前から活用していたが、新しい活用のアイ

「デアが浮かび、早く授業で試してみたい」等の声が多く寄せられています（資料5）。



資料5 夏期講座の様子（外部講師）

(3) 夏期・冬期講座「生成AIの活用」

近年の生成 AI の普及は学校においても例外ではありません。令和7年度に市内全小中学生を対象に行った調査によると、中学生の 52%、小学校5・6年生の 33%が生成 AI を使ったことがあると回答しています。生成 AI は今後ますます私達の生活、とりわけ児童生徒の生活に浸透していくことは間違いありません。しかし、児童生徒の効果的な活用につなげるためには、教師の生成 AI リテラシーは欠かせません。本研究では、令和7年度より琉球大学の加藤司准教授を招聘し、夏期講座で2回、冬期講座で1回の生成 AI 活用講座を実施しました。

本市では、実際に学校において児童生徒が授業で活用するにあたり、次のような段階を設けました。①エバンジェリストによる先行研究。②エバンジェリストによる校内研修の実施。③浦添市生成AI活用ガイドラインの理解。④保護者同意書の取得。

生成 AI 活用にあたっては「メリットの最大化とデメリットの最小化」を掲げ、エバンジェリストによる先行研究を必須条件とするなど、令和8年度の1人1台端末活用における大きなミッションの一つとなります。

(4) 浦添市ICT支援員による出前講座

児童生徒の1人1台端末の安定した活用のためには、端末の保守や授業支援を担う ICT 支援員の存在が欠かせません。本市では小学校 11 校、中学校5校に8名の ICT

支援員で対応にあたっています。

出前講座とは、学校の要請に応じて、教育研究所の ICT 支援員が各校へ出向き、15～30分の短時間で行うミニ講座です。現場の「ちょっと困った」に即座に応えるこの体制は、多忙な教職員にとっての「伴走者」であり、校内研修の充実を支える重要な基盤となっています（資料6）。

人がつながる ICT講座

いつでも ちょっぴりからでも 手を貸します

ICT支援員出前講座
9:00～16:30
随時募集中

学校単位だけではなく、学年や有志の少人数から、ICT活用のお悩みに浦添市のICTを知り尽くした支援員がお応えします。1講座15分～30分程度、小学校は学年会で、中学校は教科会等いかがでしょうか。

講座例1 授業でのICT活用法	講座例7 PC室の活用法
講座例2 学びポケットで学級通信	講座例8 楽しいプログラミング
講座例3 デジタル教科書活用法	講座例9 学びポケットで保護者連絡
講座例4 1年生へのiPad開き	講座例10 ラインズeライブラリー（ドリル）
講座例5 HPの更新方法	講座例11 ロイロノートとcanva
講座例6 生成AIで校務改善	講座例12 スプリックスCBT

ほんの一例です。あなたにICTのお悩みがあれば、それが講座になります。

浦添市立教育研究所 メールアドレス uraken2@urasoe.ed.jp
098-876-7522 担当 池田 崇（指導主事）
https://forms.gle/3q4ZovL1jv85119

資料6 ICT 支援員出前講座ポスター

4 データからみる1人1台端末等の活用

(1) 児童生徒にとってのICT機器

本市の中学生を対象としたアンケートでは、SNS やゲーム、動画視聴のために自分専用のスマホを所持している割合が 84%に達し、91%が毎日使用しています。端末は生活に不可欠な存在である一方、「やめたいのにやめられない」と感じる依存傾向の生徒も 37%存在しており、学校での適切な指導が急務となっています。

(2) 児童生徒のICT活用能力

文部科学省の指標に基づき、本市の児童生徒は情報収集や資料作成能力において着実な成長を見せています。中学生の52%が生成AIの使用経験を持ち、主な用途は「調べ学習(51%)」や「文章作成(24%)」です。これは、自ら課題を見つけ解決しようとする「自立した学習者」としての姿の一端を示しています。

(3) 教師のICT活用能力

本市の教職員調査によれば、教材研究や校務へのICT活用能力は年々向上しています(資料7)。文部科学省が実施する「学校における教育の情報化の実体等に関する調査」でも、本市は「授業中にICTを活用して指導する能力」は向上傾向にあります。しかし、「児童生徒のICT活用を指導する能力」は依然として課題であり、さらなる向上が求められています。

教師のICT活用能力		教材研究・指導の準備・評価・校務などにICTを活用する能力	授業にICTを活用して指導する能力	児童のICT活用を指導する能力	情報活用の基礎となる知識や態度について指導する能力
小学校	R7調査	99%	91%	89%	99%
	R6調査	97%	90%	87%	97%
	R5調査	92%	85%	79%	90%
	R4調査	92%	86%	84%	92%
中学校	R7調査	99%	92%	92%	96%
	R6調査	94%	88%	86%	91%
	R5調査	95%	87%	86%	94%
	R4調査	86%	77%	75%	81%

資料7 本市のコンピュータ活用調査(抜粋)

5 情報モラル・セキュリティ教育

ここまで、本市における児童生徒目線、そして教師目線から、1人1台端末を効果的に活用することで、学びの広がり・つながり・深まりを目指す取組について記してきました。これらの学びを支える土台となることとして「情報モラル・セキュリティ」があげられます。最後に、本市が取り組んでいる情報モラル・セキュリティ教育に

ついて、その一端をご紹介します。

(1) ていだっ子ルール

本市独自の1人1台端末の活用ルール「ていだっ子ルール」を定め、新年度の利用開始前には必ず動画視聴や事前指導を行っています。勝手な設定変更や不適切な画像の保存などを防ぎ、マナーを守って「文房具」として正しく使う力を養います(資料8)。



資料8 ていだっ子ルール(一部抜粋)

(2) 浦研通信

教育研究所発行の「浦研通信」ではセキュリティの最新情報や生成AI導入の必須条件を発信しています。特に、端末の丁寧な扱いを促すために「あかちゃんだっこ(両手で持つ)」という合言葉を提唱し、故障防止と愛着を持った使用を呼びかけています。

(3) 教職員研修

「学校は個人情報宝库である」という認識を共有し、ヒューマンエラーによる漏洩を防ぐため、外部講師を招聘し、市内16校に出向いての悉皆研修を実施しています。また、著作権や肖像権、SNSトラブルへの対応など、内

容についても、社会の変化に伴い毎年アップデートし、参加者からは「毎年参加しているが、毎年参加することの必要性を感じた」という感想をいただいています（資料9）。



資料9 情報モラル・セキュリティ研修の様子

6 おわりに

本市が iPad にこだわってきたのは、端末を単なる便利な道具としてではなく、子供たちが未来を切り拓くための「思考アイテム」にしたいという願いがあったからです。私たちが目指すのは、児童生徒の探究心をくすぐり、「やってみたい」に寄り添うことです。そのためには、教師が教え込む「ティーチャー」から、子供たちの横で共に走る「エスコートランナー」となり、子供たち自らが学びを調整する「自立した学習者」へと成長するプロセスを支えなければなりません。

「てだこのまち」浦添の子供たちが、iPad を正しく、賢く使いこなし、予測困難な未来に対して粘り強く納得解を求めていく力を育めるよう、私たちはこれからも伴走し続けます。